

3

It was a lovely night with a green field reflecting the moonlight.

An old lady was living alone in a house just outside of town.

She was sitting next to the window, sewing.

It was quiet around her house, apart from the slight ticking sound of the table clock.



5

“Phew… It’s getting hard to thread this needle. I can’t see things well. Perhaps I’ve gotten older.”

Suddenly she heard the sound of knocking at the entrance door.

“Oh what was that? It must be the wind. There shouldn’t be anyone visiting at this time.”

But then, she heard slight footsteps and a voice of a man outside the window.

She opened the window.



みどりの のはらに、
つきの ひかりが ふりそそぐ、
おだやかな よるの こと。

まちはずれの いっけんの いえに、
ひとりの おばあさんが すんでいました。

おばあさんは まどべに すわり、
ぬいものを していました。

テーブルの うえの おきどけいが、
ちいさな おとを ならすだけで、
あたりは しずまりかえっていました。



「ふう・・なかなか、はりに いとが とおらないわ。
もう としだから、めが わるくなってきたのかね」

ふと、とんとんと、いりぐちの ドアを
たたく おとが きこえてきました。

「おや、なんでしょう。きっと かぜの おとね。
こんな じかに たずねてくる ひとなんて、
いやしないわ」

すると こんどは、まどの そとで、
ちいさな あしおとと、
おとこのひとの こえが きこえてきました。

おばあさんは まどを あけました。

